



くうそうかいぼうかく
(本郷追分 アトリエてる、てる編)

Anatomy Fiction
(Version Atelier Teru Teru, Hongo-Oiwake)

アトリエてる、てるの子どもたち (清水勇介、青木聡華、橋本拓人、橋本慧音、三ツ木千花子、飯田光祐、守本兼吾、小松麟太郎、山名美羽、佐藤奈奈、佐藤愛、加瀬和、亀田輝杏、亀田曜、堀江優伍、大越匠、高橋架、高久絵礼奈、加藤舞、関根花音、加藤智早、河野晋也、森春樹、矢部空也、近藤由絃) が描いた絵 (画用紙にクレヨンと水彩)、HDビデオ、モニター、ラムダプリント

Drawings (crayon and watercolor on paper) by children of Atelier Teru Teru, (Shimizu Yusuke, Aoki Satoka, Hashimoto Takuto, Hashimoto Jion, Mitsugi Chikako, Iida Kosuke, Morimoto Kengo, Komatsu Rintaro, Yamana Miu, Sato Nana, Sato Ai, Kase Yamato, Kameda Kian, Kameda Kirari, Horie Yugo, Okoshi Takumi, Takahashi Kakeru, Takaku Erena, Kato Mai, Sekine Kaon, Kato Chihaya, Kawano Shinya, Mori Haruki, Yabe Kuya, Kondo Yuito), HD video, monitor, Lambda print

Overall dimensions approximately 240 372cm

協力: アトリエてる、てる 村山節子
Cooperation: Murayama Setsuko / Atelier Teru Teru

私の身体が私のものであるにもかかわらず、私は自分の身体の内側を自分の目で見る事ができない。この身体をいかにして表現し、伝えることができるのか。学生時代から現在まで奥村が強く興味を寄せてきたのは、こうした問いのもとで顕在化する、身体という概念あるいはその表象の可塑性である。

等身大の輪郭を画用紙に写し取られた子供たちは、体内の構造に関する予備知識をほとんど持たぬかわりに、たくましい想像力を存分に使って自分の身体の内側を描く。それは荒唐無稽な落書きというよりも、彼らなりに実感している身体についての認識の、平面上でのひとつの「翻訳」と言える。描いたものが抽象か具象なのか、というお定まりの議論は意味をなさず、遠慮のない省略や、由来も推測不可能な図像が私たちの不意を突く。

しかし奥村が彼らの絵を自らの作品として展示する意図は、子供たちの創造的誤読の可能性を提示するためではない。自分の身体を何らかのかたちで表象するとき、大人も彼らと同じ作業をしているはずなのだ。私たちが知っている身体は、どこかで見た他人の身体の映像や静止画や知識でしかなく、自らの身体についての知ではない。このことに改めて気づいたとき、子供たちの作業は大人に差し戻される。私たちは普段無意識のうちに、知らないはずの自らの身体を言葉で、イメージで表しているのだ。奥村の関心はその時に私たちが身体をいかに翻訳するのか、その変換作業にある。

橋本 梓 (国立国際美術館 研究員)